

青森における男女共同参画の実践と交流学習会議

小山内 世喜子

1 青森の実践と交流学習会議

交流学習会議で情報発信する青森の女性たち

毎年、NWECで開催される「交流学習会議」。地域における男女共同参画を推進するため、会館の研修・交流事業に参加した者に対するフォローアップの場として、女性関連施設等の関係機関、女性団体・グループ等との連携・協働の促進に向けての意見交換を行うとともに、ネットワークづくりを進めている。その会議にはNWECで学んだ青森の女性たちの活動が、毎回事例発表という形で紹介されている。NPO法人青森県男女共同参画研究所（以下、研究所）、NPO法人あおり男女共同参画をすすめる会（以下、すすめる会）、NPO法人弘前こどもコミュニティ・ビーぶる（以下、ビーぶる）など、学びを通して実践活動をしている青森の女性たちが全国に向け情報発信してきた。

その背景には、1970年代からの青森の女性たちの地道な学習の積み重ねと、年代を超えた横軸のつながりが構築されてきたからと言える。しかしながらそれに甘んじることなく、今後は社会経済状況の変化に対応した状況のなかで、横軸の幅を広げ、地域課題の解決に向け活動している多様な人たちとの連携を深める必要性を感じている。

横軸のつながり「NWEC あおもり友の会」の設立

2010年7月に「NWEC あおもり友の会」が会員数70名で設立された。元青森県総合社会教育センター所長の前田みき氏が代表を務め、副代表は青森地域婦人連合会長の向井麗子氏。特別会員には、青森県の男女共同参画推進のけん引役である青森県立保健大学教授の佐藤恵子氏。そして、事務局長は私、青森県男女共同参画センター副館長の小山内世喜子が務めることになった。

会員の内訳は、①1970年代から青森県教育委員会社会教育課が実施した「婦人研修」で、国立女性教育会館で交流と学びを重ね、研鑽を積んだ女性たち、②地域の婦人活動として地域を支え、活動してきた地域婦人連合会の女性、そして③1995年以降、男女共同参画を学び地域で活動している女性たちである。30代から70代まで世代を超えたメンバーが70人集まり、青森県女性の人材育成の歴史を知る機会にもなっている。

社会教育における婦人研修として学んだ女性たち

県の教育委員会社会教育課婦人教育担当の事業で、1970年代から長期研修として「婦人研修」が実施されていた。そこには市町村から推薦された婦人会や家庭教育、地域活動をしていた女性たちが集まり研修を受け、そのなかから県費で6名が国内研修に派遣された。

1週間ほどの研修期間のうち、4泊5日はNWECが開催する研修に参加し、全国から集まった女性たちとの交流や学びが、参加者同士の連帯感と地域へ戻ってからのパワーにつながった。

この研修は婦人教育が教育委員会から知事部局に移管されるとともに、青森県の女性の人材育成が新しい展開に向かった。

第4回世界女性会議以降に活動を始めた女性たち

1995年、日本から5000人もの女性たちが参加した「第4回世界女性会議 NGO フォーラム」。青森県からは、県の海外派遣生が10名、青森市からの派遣団員4名を含めた20人余りの女性たちがNGOフォーラムに参加。

II 実践の展開

NGO フォーラムではじめて経験した「ワークショップ」。テーマは貧困、暴力、核廃絶、人権問題など、女性を取り巻く課題について喧々諤々議論が百出し、とりわけ開発途上国の女性たちの説得力ある発言、その迫力には圧倒されるばかりであった。

「人権と調和の地球へ～女性の力で世界を変えよう～」に刺激と感銘を受け帰国した女性たちは、以後各地で男女共同参画の軸となり活躍した。私も青森市の派遣団員の1人であるが、一緒に行った仲間は、1人はDVシェルターを立ち上げ、1人は町議会議員になり、私も男女共同参画社会づくりに向けて県の男女共同参画センターの運営に力を注いでいる。

第4回世界女性会議以降、日本の男女共同参画が加速的に進展したように、国の動きは県、そして市町村へと波及していった。

「女性の地位向上」を掲げ学び活動した女性たちと「男女共同参画」という流れのなかで活動しはじめた女性たちをつなぐパイプ役が前田氏であり、両者が混在した会が「NWEC あおもり友の会」の特徴といえよう。

2 青森県における男女共同参画推進の歴史

いち早く男女共同参画に取り組んだ青森市

青森県内における男女共同参画の歴史をさかのぼると、そのけん引役となったのが、県都である青森市の取り組みではないか。

青森市における男女共同参画の推進の先駆けとなったのが、1986年からスタートした「青森市婦人リーダー養成研修」（のち、女性リーダー養成研修、私のための自由時間）の開校である。その受講生の中から国内研修生をNWECで開催されていた「国内交流集会」に派遣したのである。1992年からは日本女性会議に派遣。全国の女性たちとの交流と学びに刺激を受け、研修生たちは帰ってきた。国内研修生は翌年、研修の企画委員となり、研修の企画から運営、報告書の作成まで行う。それが企画力やリーダーシップとし

でのスキルとなった。

この国内研修生たちにより、女性、まちづくり、情報発信を目的に「ネットワーク A・L」というグループが誕生した。1993 年度に初代の代表だった西野寿子氏が皆に呼びかけたのが最初である。

西野氏は発足時に寄せた文章の中で「時代の流れの中で、私たち女性の力量が否応なしに試されています。この先 21 世紀にむかって、女性が自らより良い生活を創造する担い手へと広がりを見せ、その活動が各方面から評価されるでしょうか？ そのためには女性自身の研鑽、問題解決への真摯な取り組み等がなされなければ…」¹⁾と述べている。このメッセージの通り、ネットワーク A・L は「学習や語り合いだけで自己満足せず、地域の企画参加やイベントも行いたい」という具体的な提案のもと、活動の方向性が位置づけられていった。それから 20 年、常に先見の明で地域の課題を取り上げ、「決定権を持つ場への女性の参画」「社会保障」「ドメスティック・バイオレンス」「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ」「介護の社会化」などをテーマに活動を展開、政策提言まで行い、青森市の男女共同参画の推進を担う中心メンバーとして活躍してきた。交流学习会議で事例報告したすすめる会の千田晶子氏もネットワーク A・L で育ったメンバーである。

そして「第 4 回世界女性会議 NGO フォーラム' 95」派遣団員（市民）はいずれも、ネットワーク A・L の女性たちであった。「初心者マークをつけて、参加するだけの私たちであったが、帰国後、NGO フォーラムでの思いを胸に、自分が見たこと、感じたことを多くの人に語り気づきの場になればと、フォーラムや勉強会などで、積極的に報告会を開いてきた。（中略）それから 2 年、自分たちから日本の女性へ発信していく場を持つことができた。埼玉県嵐山にある NWECC で開かれる女性学・ジェンダー研究フォーラムでのワークショップ開催である」²⁾と述べている。

青森市は 1995 年 3 月に「あおり女性プラン 21」を策定して以来、1996 年 7 月から公募の編集スタッフによる「女性情報誌アンジュール」を発行している。10 月には「男女共同参画都市青森宣言」を行い（全国で 8 番目）、

II 実践の展開

翌年から10月を男女共同参画都市宣言月間として、市民フォーラムなど様々な啓発事業を実行委員会形式で開催していった。

その経験の蓄積があったからこそ、市民主体の「日本女性会議2002 あおもり」が開催できたといえる。2000年に実行委員会が設立。2002年10月に記念講演、2つの全体会、13の分科会で構成された「日本女性会議2002 あおもり」が開催された。

日本女性会議は青森市の主催事業であったが、実行委員会には県内各地から女性たちが集まった。参加・協力団体には「弘前きらめき隊」「カノンあおもり女性大学同窓会西北五支部」「はつらつ虹の会」といった青森市以外の活動団体も名を連ねていた。

なお、私の男女共同参画の学びのスタートは、青森市女性リーダー養成研修であり、活動のスタートはネットワークA・Lであった。その後、数々の青森市における男女共同参画推進活動に中心メンバーとして参画し、学びと実践を繰り返し、今に至っている。

女性の人材育成講座「あおもり女性大学」の開校

日本女性会議2002あおもりの実行委員に他市町村から参加していたメンバーの多くは、その3年前(1999年)に青森県が女性の人材育成事業として立ち上げた「あおもり女性大学」の卒業生である。あおもり女性大学で一緒に学んだ青森市のメンバーからの誘いと活動することで一緒にエンパワーメントしたいという想いで参画し、力を発揮した。

そのあおもり女性大学は1999年、女性の自立と社会参画を促進するために、専門的かつ幅広い学習の機会を提供し、あらゆる領域において問題の解決に向け行動でき、政策方針決定の場に登録できる女性を養成し、「青森県女性人材バンク」に登録するとともに、卒業生を積極的に審議会に登録するなど、男女共同参画社会づくりの推進を目的として実施された。

しかし、開校に至るまでの背景には男女共同参画行政に関わり、自分自身もライフワークとして男女共同参画の推進に取り組み、現在、研究所にも所属し

ている山谷文子氏の並々ならぬ努力があった。山谷氏はあおもり女性大学1期生の会10周年記念誌、座談会の中で「1996年から5年間、青森県女性の船という事業があったのですが、その第1回目の時に、私も事務局として乗って県内のいろんな女性たちと出会って、素晴らしい人たちがいっぱいいるんだなということがわかったのです。それまで、いろいろな仕事をしていく中で、女性は人材がないということをよく聞きました。女性がいろいろな場面に登場しないので、『ぜひ女性を登用してほしい』という話をすると必ず、『女性はちょうどいい人がいないんだよな』の一言で、登用が進まなかったのです。私は女性たちが学ぶ機会をつくって、リストをつくって、『いない』と言われた時に『はい、どうぞ』と出せるようにしたいと思ったのです」と語っている。

事業化するまで4年かかり、少ない予算ながらも、いくつかの講座を青森市との共催事業にしたりすることで、内容の濃い講座となった。2年間の講座で、1年目は24講座を実施。2年目は県政課題について受講生が決めたテーマで卒業論文を作成するものである。長いこと、文章を書くことから遠ざかっていた女性は必至の想いで論文を書き上げた。だからこそ、2年間で培われたエネルギーが卒業後の地域での活動につながった。

1期生は20人募集のところに「待ってました」とばかりに意欲的な女性たち35人の応募があり、29人が卒論を書き上げ卒業生となった。私もその1人である。卒論を仕上げた自信が「絶対何かをやってやろう」というエネルギーに変わっていった。あおもり女性大学は2007年までの8年間で100人余りの卒業生を輩出。2007年からはじまった「あおもりウィメンズアカデミー」へと引き継がれた。ぴーぶるの代表、清野真由美氏はあおもりウィメンズアカデミーの修了生であり、男女共同参画の実践者の先輩方との交流の中で、男女共同参画を意識するようになり、男女共同参画ヤングリーダー会議（内閣府主催）にも参加している。

卒業生の会「あおもり女性大学同窓会」が県内のネットワークづくりの一因にあおもり女性大学を卒業した仲間たちは、情報交換・学習・研究・親睦

II 実践の展開

を図ることを目的に2001年に「あおり女性大学1期生の会プルミエール」、2002年に「あおり女性大学同窓会（県内に支部を組織）」を立ち上げた。市部で活動する卒業生はすでに男女共同参画の推進を目的とした既存の活動団体や仲間などの基盤があるが、小さな町・村のメンバーは、男女共同参画という言葉すら言い出せないような環境の中で生活していた。1人ではできないことを、同窓会の協力を得ながら実施。また、仲間との共感・共有、情報交換により、モチベーションをアップし活動することができたのである。

また、卒業論文執筆という経験をとおして調査研究に関心が深まった1期生が中心となって2001年に「青森県男女共同参画研究所」という研究グループを結成。2002年にNPO法人青森県男女共同参画研究所に移行。その後は広く会員を募り、様々な切り口による青森県内での男女共同参画の推進活動を展開している。各月で発行している会報も53号になる。

大学のまち、弘前市における男女共同参画の学びの場

弘前市ではあおり女性大学の開校と同じ1999年に「弘前きらめき女性塾」が開校した。「弘前きらめき女性塾」は1988年度の「ふるさと創生事業」の1億円を「弘前創生基金」として積み立て、人づくりに活用した事業のひとつである。2年間コースで、1年目は基礎的学習期間として月1回の全体研修とテーマ別のグループ活動や視察・交流研修を実施。2年目はテーマ別のグループ活動を中心とし、自主的な研究をし、卒塾式には卒塾発表会を実施した。2003年までの5年間で、4期111人が卒塾した。

弘前きらめき女性塾の特徴は、塾長でもある弘前大学教育学部助教授（現在は教授）日景弥生氏をはじめとする、アドバイザーを4名。ひろさき創生塾1期生から2名、男女共同参画受託研究グループ員2名をサポートとして配置したことにある。また、受講料無料は行政主催事業の場合あたり前であるが、活動費の補助（自ら企画する分科会またはグループの活動に要する経費について、補助金を活用することができる）が、塾生1人あたり、1年目は5万円、2年目は3万円が支給されることである。その補助費を各グループが

自主開催の学習会や視察などに活用し、研究を深めていった。グループ活動の内容は、「環境」「子育て支援」「家族経営協定」「障害者支援」「政治」など多岐にわたり、地域課題の解決に学びや行動を通して取り組んでいった。

卒塾生たちは「きらめき会」を立ち上げ、2001年にオープンした弘前市の男女共同参画の拠点施設「弘前市民参画センター」の開所並びに運営にも力を注いでいる。

「まちづくり」を軸に学習を重ねたはちのへ女性まちづくり塾

あおり女性大学の1期生が卒業した2001年に八戸市において「はちのへ女性まちづくり塾（以下、まちづくり塾）」が開校した。2001年から2007年までの6年間で129人が受講、91人が修了した。2003年度までは市担当職員による事業運営であったが、51人の修了生を輩出した4年目からは、まちづくり塾の修了生に企画から運営までを委託した。受講生の中には、あおり女性大学の卒業生も多く、すでに熟練されたメンバーが受講していたこともあり、修了生への委託は容易であった。

まちづくり塾の特徴は講座内容が「まちづくり」に重点が置かれている点である。まちのランドデザインや都市計画マスタープランを学び、閉講式では市長との意見交換会を実施していた。2002年に東北新幹線が八戸市まで開通し、八戸市は活気づいていた時期であり、市民のまちづくりに対する関心も高まっていた。

修了生が企画・運営をするようになってからは、講座内容もまた一段と充実し学習の場も会議室から、市内各地へと足を運ぶ機会が増してきた。港町八戸らしく、北日本造船やマルヨ水産、また田向遺跡や縄文学習館といった、市内一円の施設見学も講座に取り入れた。2004年度の最後の講座では、市長といっしょに繁華街を視察し、その後市長との意見交換会も実施している。

このまちづくり塾の修了生が集まって「はちのへ女性まちづくり塾生の会（以下、塾生の会）」を2003年2月に立ち上げた。各種審議会・委員会等への参画。2004年度には八戸市中心街に、イベント参加者に対して「中心

II 実践の展開

街に足りないもの、どんな店がほしいか」など、ヒアリングアンケートを実施。市民の声をまとめ、そこから見えてきたことについて、商工関係者や商工会議所等と意見交換をしている。2006年度には八戸市生活交通再編計画策定事業の一環として行われた調査を依頼された。そして、2007年には2010年の東北新幹線青森駅開業を控え、八戸市がこれまで以上に魅力的なまちにならないければ、単なる通過点になってしまうという危機感から、大好きな八戸の観光事業に改めて取り組むことにした。それが内閣府の地域活性化事例研究事業のオリジナル観光マップ作り³⁾などであった。

八戸市は東日本大震災の被災地でもある。塾生の会では、八戸市商工会議所から施設管理委託を受け運営しているアントレプレナー情報ステーション（創業支援拠点）⁴⁾を拠点として、被害に遭われた避難世帯の方々に必要な物資を提供する「マッチング支援」を行った。これは、避難世帯の方々が公的住宅などに入居するにあたって、個別のニーズを聴き取り、必要とする生活用品全般を市民から提供してもらい、生活再建をお手伝いする事業であった。また、2012年1月から3月までに6回、青森県男女共同参画センターと共催で被災者支援として「ホッとルーム」を開設した。

3 青森県の男女共同参画の拠点施設「アピオあおもり 青森県男女共同参画センター」

拠点施設としてこの10年をふりかえり

2001年、青森県の男女共同参画・子育て支援の拠点施設として、アピオあおもり青森県男女共同参画センター・青森県子ども家庭支援センターが青森市にオープンした。公設公営5年の後、2006年から行財政改革の一環としてアピオあおもりにも指定管理者制度が導入され、民間企業の共同体であるASTAC・G（アスタクグループ）が受託し、現在3期目の1年目となっている。私は県直営時代に情報ライブラリーの非常勤職員として働いていた経験と市民活動で取り組んできた男女共同参画に関するスキルを生かし、受託者の1人として関わった。私が受託者として運営に関わることになった時、

あおり女性大学の仲間の「世喜子さんが運営に関わってくれることになって安心したわ」の言葉に励まされた。

拠点施設の運営者として心がけた点は、利用者目線を忘れないことである。PDCA マネジメントサイクルを意識し、事業評価の実施と男女共同参画の動向にアンテナを張り、県民のニーズにどうマッチングさせていくか。そして、いかにして各地域や分野で学び、活躍している女性たちの力を発揮する場をつくるかに力を注いだ。これは地域課題に対応する多様な学習を展開することが可能となることだけではなく、地域住民の相互交流を深め、分野を超えた連携協力のネットワーク構築にもつながった。

当センターは青森県子ども家庭支援センターとの複合施設でもあることで、子育て中の若い女性たちもたくさん足を運んでくれる。指定管理者として3年目に入った時、文部科学省からの再委託事業で託児付の「女性再チャレンジ支援事業」の講座を開催した。子ども家庭支援センター事業で館を訪れていた若い女性たちが、「自分自身のスキルアップ（自分探し）」を目的に講座を受講した。「子どものために」と行動していた女性たちが1人の人間として「自分のために」行動できるようになったのである。「つながり」を実感できた。また、その翌年から起業をめざす女性たちの支援事業もスタートした。起業に関心を持っているけれど、ちょっと自信がなく踏み出せない女性たちに、「おためし起業」の場を提供する事業である。

おためし起業でセンターとつながりをもった育児休業中の公務員女性が、「自分らしさ」というメッセージにひかれセンター講座に参加した。彼女は「嫁」「妻」「母親」という役割に縛られ「モヤモヤ」したものを抱えていた。しかし、センター講座で青森県立保健大学教授の佐藤恵子氏に出会い、自分がこれまで抱えていたものがジェンダーの問題であったことに気づいた。その後「しあわせ未来予想図」というグループを立ち上げ、自分と同じようにジェンダーにとらわれ生きづらさを感じているママ友たちに携帯メールで呼びかけ、学びの場をつくった。自主活動で行っていたその学びの場を、1年目は当センターが、2年目は子ども家庭支援センターが支援している。また、

II 実践の展開

研究所も、多世代の人たちに今の若い母親たちが抱えている課題を知ってもらおうとワークショップを何度も開催し、応援している。

おためし起業でご一緒したプチ女性起業家の「蜘蛛の巣状ネットワーク」には驚かされるばかりである。相互の協力体制と仲間や情報交換の場を大切にしている。

2010年、青森県中南県民局地域支援室から1本の電話が入り、今度「津軽の女性起業入門講座」を開催するので、周知および広報の協力をお願いしたいというものであった。当センターの起業支援の取り組みや、女性が置かれている現状、一步を踏み出せない女性たちの支援で必要なことなどについて話をしているうちに、多くのヒントを得たらしい。今年度は助言をいただきたいと再度足を運んでくださったうえに、「起業を目指す女性の集い」に相談コーナーを設置し、当センターの相談員等を配置したいという依頼があった。「女性の自立」という同じアウトプットをめざす関係機関が互いの強みを生かし合い、連携できた事例でもある。

このように指定管理受託3年目以降、事業を通し、人のネットワークが「つながっている」ことを実感できた。

学びから起業へ 第2ステージの展開事例

青森県男女共同参画センターが「女性再チャレンジ支援事業」に取り組んだ2007年、五所川原市で子育て支援をしているNPO法人子どもネットワーク・すてっぷ（以下、すてっぷ）も同じように受託し五所川原市で開校した。五所川原市は人口6万人弱、地域の特性からいって、再チャレンジの女性たちが働く場は郊外型の大手スーパーマーケットでのパートか有期雇用の行政機関の臨時職員しかない。そこで、すてっぷは地域活性化につながる地産地消をテーマに地域の資源は何かを考え、それを使ってできること（コミュニティビジネスなど）をバーチャルで作りだし、社会参画につなげていく内容とした。「マインドアップ講座」「コミュニケーション講座」「ITスキルアップ講座」「地産地消チャレンジ講座」などの10回連続講座で実施した。

主催者すてっぷの代表理事を務めていた辻悦子さんは、2009年4月に津軽鉄道津軽五所川原駅前の地域交流施設「サン・じゃらっと」内に「コミュニティカフェでる・そーれ」を創業した。辻さんは常々「駅前が寂しい。気軽にちょっとした休めるカフェがあるといいのに。しかも大手カフェチェーンではなく」と課題意識を持っていた。子育ても一段落したそんな時、すてっぷが「女性再チャレンジ支援事業」を受託し、女性が働くことの意味をあらためて勉強した。また同時期に県が実施した基本計画推進重点事業「絆で結ぶ地域がつながるモデル支援事業」でソーシャル・キャピタルの考え方を学んだ。そこには偶然にもすてっぷの仲間がいた。その3つがあったからこそ食の提供、地場産品等販売を行う「コミュニティカフェでる・そーれ」の創業に結び付いたという。

辻さんは「私は子育て支援の活動を長く続けてきましたが、一分野だけの活動では解決できないことがたくさんあり、現在のでる・そーれに発展しました」と語っている。まさしく、多分野の学びと行動、連携による相乗効果のなかで、地域課題を可視化し、コミュニティビジネスとして実践している1人であった。

4 今後の課題

社会状況の変化に対応した学びの場

青森県における男女共同参画の取り組みは、1970年代の「女性の地位向上」を目指す婦人研修事業からはじまり、90年代半ばから「男女共同参画」を目指す時代が変わっていった。そして、2008年に打ち出された「課題解決型の実践的活動＝第2ステージ」以降、そのあり方が変化している。一方、交流と学びの中で「持ち運べる人間関係」ができ、つながりによって相乗効果を高めることができていることがわかる。

夫の片働き時代から共働き時代に変わり、専業主婦時代の終焉とまで言われる今、女性の学びの場にも変化が生じてきている。拠点施設であり、学び

II 実践の展開

の場の提供者である男女共同参画センターとして、社会経済状況の変化を踏まえて、この事業がまだ有効か、市民ニーズはあるか、センターが実施すべきかなどを常に検証していくことが必要である。その上で、情報収集力を高め、先に述べた辻さんのような実践者、多分野の方々と連携し、一緒に事業をすすめることで、草の根的に男女共同参画の理解を広げていく必要がある。

「若い人たちが育たない・後継者がいない」という声も聞くが、若い世代を取り込むには、理念や目的に価値を見い出せること。活動することで自分の成長が実感できること。最初の一步を気軽に踏みだせる環境づくりなどが必要である。運営者は価値観や考え方、興味や関心の方向性が多様化していることに気づくことが必要である。

「持ち運べる人間関係」を紡ぐことができるしかけづくり

2012年9月に「避難所ワークショップ」を青森県男女共同参画センターで開催した。この事業は男女共同参画地域防災体制づくり事業の一環で、町内会や県防災士会、女性消防団、PTA 関係者、DV 被害者支援者、子育て中の母親、青森市の危機管理課、健康福祉政策課、男女共同参画室などから19名の方に実行委員になっていただいた。開催にこぎつけるまでには町会長宅に何度も足を運び、事業説明を繰り返した。また、事前に3回の防災ワークショップを実施し、「男女共同参画の視点が盛り込まれた避難所づくり」についてみんなで話し合った。当初、町会長たちは、初動の一時避難や要援護者支援の問題に終始していたが、回を重ねるごとに、男女共同参画に対する理解が深まっていった。そして、地元町会長が「今度、自主防災組織についての勉強会をすることになった。これも、みなさんに刺激されてのこと」と、言ってくださった。

前兵庫県理事の清原桂子さんは「ネットワークとよく言われますが、個人と個人の信頼に裏打ちされた人間関係のないところで、組織と組織のネットワークを機能させようとしてもむずかしい。民間・行政を問わず、肩書きが変わっても続いていく『持ち運べる人間関係』を紡ぐことのできるしかけ、一緒に何かを『する』ことによって人間関係を深めていくことのできるしか

けが、今まさに大切であるように思います」⁵⁾と言っている。今、多くの人が関心を持っている「防災・震災復興」の取り組みを通して、人間関係を深めることができた事業だった。

めざす方向は「性別にとらわれず、一人ひとりが個性と能力を発揮できる社会」

1996年から5年間続いた「青森県女性の船」。この船には女性の地位向上を目指して頑張ってきた女性たちから、男女共同参画社会づくりを目指している女性の活動家たちまで、多種多様な女性たちが参加、3日間を共に過ごしたことで結束を深めた。「『教育』についての分散会では、若い方々がそれぞれの分野で活躍し、立派にそだってきていることをうれしく思いました。青森県の未来バンザイ！」(八戸市 林 則子)⁶⁾。こんな素地があるからこそ、NWEC あおもり友の会が設立し、交流学習会議で事例発表できる人材・団体も育ってきたと言える。

あるテレビ番組でこんな言葉を聞いた。「女性たちが各部署に増えてきた。同じ方向をむいて共感できる仲間が増えた」「いろいろなことを動かして、いろいろな人に協力してもらって、はじめて少しずつ改革できる」⁷⁾と。男女共同参画社会づくりに正面から向かってきた人、自分らしい生き方がしたいと起業家を目指した人、専業主婦のモヤモヤ感を抱え苦しんでいる人、そして、社会教育や婦人会活動をしてきた女性たち。入口はみんな違って、めざす着地点は「性別にとらわれず、一人ひとりが個性と能力を発揮できる社会」である。同じ方向を向いて共感できる仲間が増えることで、エンパワメントしていける。1人でできることは限られている。その点を線に、線から面に、そして面から立体にしていこう。

交流学習会議が男女共同参画社会をめざす「多様な価値観の人々の融合の場」に「交流学習会議」に提案がある。地域課題の解決に向けた取り組み事例として、「起業」や「環境」「国際交流」といったこれまであまりテーマとされていない分野の事例を紹介し、男女共同参画の視点でみた時、どんな課題が

II 実践の展開

あり、解決していったかを具体的に紹介してはどうだろうか。そして、学びのフォローアップのみならず、これから参画してほしい分野の人たちをも巻き込み、多様な価値観の人々の融合の場になることが重要だと考える。それが「男女共同参画はわたしたちの生活に関わること」の理解を深めることにつながるのではないか。

最後に、本稿の執筆にあたり、過去の報告書等を読み返し、記録を残すことの重要性をあらためて確信し、女性アーカイブ等の構築の重要性を感じた。また、今回は青森県内旧3市と言われる青森市、弘前市、八戸市のみの紹介となったが、この他にも県内には男女共同参画社会づくりに地道に取り組んでいる女性たちがたくさんいることも付け加えたい。

注・引用文献

- 1) 西野寿子 1998「“旬な個々で”活動のネットワーク A・L」『青森市の女性政策』19、青森市
- 2) 小山内世喜子 1998「人権と調和の地球」『青森市の女性政策』24、青森市
- 3) 内閣府 HP <http://www.gender.go.jp/t-challenge/hachinohe/index.html> 参照
- 4) アントレプレナー情報ステーション HP、<http://www.8cci.or.jp/antore/index.html> 参照
- 5) 清原桂子 2010「特集 地域における男女共同参画の推進について (1)」『共同参画』2、内閣府
- 6) 林 則子 2000「ときめいて輝いて～未来を拓く希望の海へ～」『第5回青森県女性の船報告書』58、青森県
- 7) NHK 2012年9月17日放送「TEAM 美容家電の女たち」『プロフェッショナル仕事の流儀』

(おさない・せきこ 青森県男女共同参画センター副館長)